

まこと流まちづくりの地平  
第004号 2008/03/20

松本誠のメールマガジン 第4号

〃〃〃 吾兵衛逍遙

仲間同士の「気」の共鳴が「自然治癒力」を創る  
がんと闘う大学教授から元気をもらう

〃〃 急性のショック状態から生き返った、現役のバリバリのがん患者

3月上旬の土曜日、姫路の県立大学環境人間学部で開かれた大学教授の退職記念講演会は、一風変わった趣向の会合だった。

200名ぐらいがぎっしり詰めかけた四角い教室は、がん患者やさまざまな病を癒す活動をしている人たち、ひきこもりの人々を元気づける人たち、無農薬の有機野菜づくりに励む農民、そば打ち名人、在日コリアンの人権活動家、中国の労働運動や環境運動に取り組む人たち等々が音楽を聴き、創作太極拳を披露し、講演に耳を傾けた。

この日の主人公は、吉田勝次さん。台湾をはじめアジアの民主主義の研究者であり、実践活動家でもある硬骨の歴史学者、国際政治学者である。震災復興の市民運動の中で知り合って10年近くになるが、3年余り前に右腎臓を摘出するがん手術で一命を取りとめた後も前立腺がんと肺への転移もあって、自称「現役のバリバリのがん患者」として闘病生活を続けている。「3つのがんを抱えて、3年も生きているのは新記録」と大声で笑い飛ばす姿からは、とても生死の境をさまよった人とは思えない生命の“みなぎり”を感じる。

〃〃 やれることは手当たり次第、貪欲に挑戦

がんの告知を経て急性のショック状態から立ち直ったあと、先生から「笑いががんにはいいと聞いたので、ワハハの会に入会した」と電話をいただいた。用件は、私が難治性肝炎を克服したのにケール青汁療法などが効いたという話を聞きつけての情報収集だった。姫路からさっそく明石まで駆けつけた先生は、すぐさま生のケール葉の宅配を契約し、毎週9キロのケール葉をジュースにして毎日1リットルぐらいの青汁を飲み続けている。

ケールだけではない。先生がこの3年間に試みたのは丸山ワクチン、朝夕3時間の散歩、気功・太極拳、漢方薬、玄米菜食、半身浴、北播磨の山岳から湧き出る清水、指絡療法、ホルモン療法、ビタミンCの大量摂取、俳句や短歌、油絵などの創作活動……と、友人知人に進められたことは貪欲に取り入れていった。

「友人が勧めてくれたことを断る理由はない。なぜ効くのか、治るのかなど考えている暇はない。いいことは、副作用がない限りすべてやってみる。がんには特効薬はない」と断言する。

そうした日々を送っていると、いつしか「ひょっとしたらいけるのではないか」という気持ちが芽生え、肯定的な感情は確実に生理的現実を生んでいった」と振り返る。

「人間には本来、偉大な生きる力が備わっている。人間には生きていこうという秘密のメカニズムが隠されているのを、普段は忘れてい」と、生きる意欲が自然の治癒力を発揮させることを、闘病体験を人間の生き方の哲学に昇華させて説いた。医療技術に頼るのではなく、医療技術に一定の役割を認めながらも、人間の内部に秘めている生きる力と自然治癒力を大事にしようという実体験から得た提案は、理論的にも思想的にも納得できるものであった。

〃〃 再出発への賛歌、大学に新しい「健康教室」設立

退職記念講演会には、「さあ ともに出発だ」と大書した呼びかけのテーマが掲げられた。吉田さんの記念講演の一つは、以上のような絶望から希望を持つことによって再生しようとする人間の賛歌だった。もう一つの講演は「身近なデモクラシーの担い手」にかかわるテーマだったが、3人にひとりのがん患者になる現代社会にあって、生活習慣病も含めた現代社会の「病」の苦しみ、悩みから人々が希望を持って「生」へのたたかいを挑む元気の源を、シャワーのごとく浴びた一日だった。

吉田さんは4月から、大学の同僚や市民の協力を得て同大学内で健康講座を開設する。呼吸法や太極拳、気功の練習と健康学習を通じて、病の予防や克服と癒しの場をめざす。何よりも、人々の出会いを大切に、「病に悩む人の、病に悩む人による、病に悩む人のための教室運営」をおこなうという。ここにも「危機を人生の好機」と受け止める人々がいた。

.....

〃〃〃 明石まちづくり小史 < 4 >  
=== 海峡に生きるまち、恵みと危険が背中合わせ ===

いかなごのシンコ漁に湧き立つ明石海峡と「魚のまち」を前回のメルマガに書いた5日後、まさかの海上事故が発生し、明石海峡周辺の漁業が壊滅的な大打撃を受けるとは、夢にも思わなかった。

3月5日、明石海峡のど真ん中で砂利運搬船とタンカー、貨物船の3隻が次々と衝突し貨物船が沈没、乗組員2名が死亡、2名が行方不明の惨事が起きた。全国有数の速い潮流と過密海峡。海の安全を守る幾重もの監視、警告体制があったにもかかわらず、常識はずれの自動操舵に委ねた航行や監視警告システムを無視した結果の事故と見られている。

問題は、海難事故にとどまらず、沈没船から流出した油による漁業被害が深刻な影を落としている。最盛期を迎えた養殖ノリは油汚染で操業中止と全量廃棄に追い込まれ、巨額の損害を強いられている。はじまったばかりのシンコ漁も明石海峡とその周辺海域での操業を中止、漁師らは漁業ではなく、油の回収に追われている。

明石海峡は、淡路島北端と明石・舞子間の最も狭い水道で幅4キロ弱しかない。この中央部の幅約2000メートルの半分ずつが東西方向の航路に指定されている。一日約2000隻の船舶が航行するほか、その航路を横切るように明石・淡路航路のフェリーや高速旅客船が横断し、たくさんの漁船が航行、操業する。

海峡で起きた大きな海難事故は、戦後まもなくの1945年12月9日に起きた播淡連絡汽船「せきれい丸」の沈没事故だ。わずか34トンの船に定員の3倍を超える349人が乗り込み、淡路・岩屋から明石港に向かう途中、北西の強い季節風にバランスを崩し、一瞬のうちに転覆した。戦後の混乱期、明石の闇市に買出しに出かける人や生鮮品の行商に出かける人などが人を押しにけるようにひしめいていたが、死者行方不明者が304人に及んだ。助かったのはわずか45人だった。

明石海峡はもともと、激しい潮の流れに加えて、冬場は北西の強い季節風などで操船の難しい難所でもある。明石海峡大橋の建設の際にも、巨大な主塔の橋台が海峡の真ん中に2つも設置されることによる潮流の複雑化や海底の変化などによる潮流と漁場への影響が懸念されていた。大橋の建設工事に先立って、海峡を見下ろす淡路島の北端の山上に大阪湾海上交通センターが設置され24時間の監視体制が取られたのも、そのためだった。

明石海峡にはもう一つ大きな不安がささやかれている。1970年代にはじまった巨大なLNGタンカーの航行だ。液化天然ガス(LNG)を特殊なタンク4基に詰めた11、2万トン級の巨大タンカーが、インドネシアや中東から紀伊水道を経て大阪湾の堺泉北埋立地にある大阪ガスの基地に立ち寄った後、明石海峡を経て姫路の大阪ガスの供給基地に向かう。

4つの大きな球形タンクなどが目立つタンカーは、すっかり海峡の「風物詩」に落ち着いた感じだが、陸地まで2キロしかないところで万一何らかの事故などで爆発した場合には、海峡に面した明石のまちは爆風で吹っ飛ぶという危険性が、当時は盛んに指摘された。もちろん幾重にも事故防止策が施され、タンクも特殊な構造にはなっているが、「絶対安全」という保障はない。

当初は明石海峡の航行を規制する動きもあったが、エネルギー転換を優先して大阪で積荷を減らしてから航行するなどの条件をつけて許可された。海峡を西へ通過する同タンカーの喫水が高く、一段と大きく見えるのはそのためでもある。

近年、世界中でタンカー等の事故が相次ぎ、重油の流出によって海洋汚染と水産資源へのダメージが相次いでいる。明石海峡は世界の海の中でも、超一級の折紙をつけられている海域である。外洋でも遠洋よりも近海の方が漁場の価値が数倍上回る。海に囲まれた日本の近海よりも、瀬戸内海の漁場価値は一層高い。瀬戸内海でも明石海峡一帯の漁場価値は極めて高いから、明石ブランドが重宝される。

その明石海峡周辺で海洋事故が起きた場合の影響は、計りしれない。海峡の平和と安全は、「魚のまち・明石」の命でもある。今回の漁業被害は、漁業者だけの問題ではないという認識が、広く求められている。

.....

